

2023

文部科学省科学技術人材育成費補助事業

「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（特性対応型）」

兵庫医科大学ロールモデル集

# Nanaïro

－医師・研究者 編－

vol. ①



# Nanairo

研究を始めたばかりの若手研究者から「この研究の先に自分にはどんな未来があるのか、不安になることがある」という声を聞くことがあります。働き方が多様化すればするほど、「なりたい自分」を見つけることは簡単ではないのかも知れません。

タイトル『Nanairo (なないろ)』には、性別もキャリアもライフスタイルも違いますが、同じ兵庫医科大学で働く医師・研究者たちが、迷い悩みながらも日々の診療や研究に打ち込み、時には家庭と仕事の選択に葛藤しながら、“それぞれの色で自分らしく生きる”、そんな意味を込めました。等身大のロールモデルとして読んでいただけたら嬉しく思います。この冊子が、将来を担う若手医師・研究者や、医学生を応援する一冊になることを願っています。

最後に、今回のロールモデル集発行にあたり、本企画の趣旨にご理解をいただき、快く取材にご協力下さり、寄稿文を寄せていただいた皆様に、心から御礼申し上げます。



## ごあいさつ

ダイバーシティ担当 学長補佐／ダイバーシティ推進室 室長  
消化器内科学（肝・胆・膵内科）教授  
兵庫医科大学 1983 年（昭和 58 年）卒

## 飯島 尋子

兵庫医科大学の若手の医師・研究者の方々は、公私ともに多忙な中、ご自身のキャリアプランを考える中で様々な希望や悩みを抱えておられると思います。次世代を担うすべての方々への“応援メッセージ”として本企画を行いました。

医師や研究者と言う専門職のなかで誰もが自分らしく働き、認め合う環境の実現を目指したいと思います。このロールモデル集は、私たちからのエールです。次号も楽しみにして下さい。



## CONTENTS



### I インタビュー・先輩に聴く、私の道のり

- 高雄 由美子…………… 3  
ペインクリニック部 教授
- 江口 明世…………… 5  
医療クオリティマネジメント学 講師
- 庄司 拓仁…………… 7  
医学教育センター 講師

### II 寄稿・私の生き方・働き方～ナナイロ

- 奥田 真珠美…………… 9  
小児科学 教授
- 西村 貴士…………… 10  
超音波センター（消化器内科学） 講師
- 柏 薫里…………… 12  
医学教育学 講師
- 野瀬 聡子…………… 13  
消化器外科学（小児外科） 講師
- 堀尾 勇規…………… 14  
消化器外科学（炎症性腸疾患外科） 講師
- 小椋 英樹…………… 15  
病原微生物学 講師
- 木原 多佳子…………… 16  
病理学 病理診断部門 助教
- 大門 愛加…………… 17  
循環器・腎透析内科学 助教

- 本学の取り組み① ～研究支援員配置制度…………… 18

### III 特集 ～インタビュー・パートナーと共に歩む

- 吉原 享子…………… 19  
呼吸器・血液内科学 助教
- & 吉原 哲…………… 19  
輸血・細胞治療センター（呼吸器・血液内科学） 准教授

- 本学の取り組み② ～各種支援制度、キャリア支援相談…………… 22



interview

# 経験は無駄にならない。 常にチャレンジを

ペインクリニック部 教授 高雄 由美子  
臨床疼痛学 兼務

兵庫医科大学 1987年(昭和62年)卒 Yumiko Takao

### 私のモットー

敢然と戦うものが勝利する

### 専門分野

ペインクリニック、疼痛治療、麻酔科学

### 資格

日本ペインクリニック学会 専門医  
日本麻酔科学会 機構専門医 指導医  
医学博士(1987年)

## 痛みの治療にやりがいと適性を感じて

私が入局先に麻酔科を選んだ理由は、外科医であった父親の影響があり、外科的な治療に興味があったことがあります。麻酔科の仕事に就く前は知らなかったのですが、麻酔科の仕事は多岐にわたっており、周術期管理以外にもペインクリニックや緩和ケア、ICUといった部門があります。ひと通り経験した中でも、私は特にペインクリニックにやりがいや適性を感じたので、この道に進もうと決めました。

ペインクリニック部は、通常の痛み止めが効かないような、やっかいな痛みの治療を行う診療部です。世の中には痛みに苦しんでいる人がたくさんいます。日本における慢性疼痛患者は約3000万人とも言われており、痛みがあるために仕事ができない人、日常生活がままならない人が多くいらっ

しゃるのです。そんな人たちに痛みの治療を行うことによって、社会復帰ができたり、生活の質が良くなったりする姿を見ると、とても大きなやりがいを感じます。もともと人と関わる仕事が好きですので、そういう意味でも適性があったのかもしれない。

本格的にペインクリニック専従で仕事を始めたのは、30代半ばの頃から。以来、ずっとこの分野に携わってきたことで、積み重ねてきた知識や技術はもちろん、多くの人たちとのつながりを得ることができました。患者さんや院内の先生方だけでなく、学会の活動などを通して他大学や他施設の麻酔科・ペインクリニックの先生方と築いてきた人間関係は、私にとって大きな財産ですね。

私はこれまでに、医学博士、日本麻酔科学会 麻酔科専門医・指導医、ペインクリニック専門医を取得してきました。学位や専門医を取得することは、自分がやってきたことの集大成として、とても意義のあることだと考えています。仕事をしながら、試験に向けて勉強したり、研究論文をまとめたりするのはもちろん大変です。でも、集中して勉強できる貴重な機会でもあり



ます。最近は「学位はあってもなくても良い」という考え方もありますが、やはりキャリアを築いていく上で、学位がないとチャレンジできないこともあります。将来の選択肢を広げるためにも、ぜひ若い先生方には学位取得を目指してほしいと思います。

## 人材育成やダイバーシティ推進に尽力

私は現在、ペインクリニック部の部長を務めています。自分が所属する診療部の価値を高めて、ここで働く人たちに自信を持ってもらうこと。そして、後に続いていく人材を育成すること。この2つが大きな使命だと考えています。



ペインクリニック部をより価値ある存在にしていくために、症例を増やす努力もしていますし、学会発表や講演会といった発信活動も積極的に行っています。また、ペインクリニック専従の医師はまだまだ少なく、分野として知名度も低い状況ですので、ペインクリニック学会として一般向けや医療従事者向けに啓蒙活動も行っています。

人材育成に関しては、若い医師たちに成功体験を積ませることが重要だと考えています。臨床経験だけでなく、学会発表や論文作成、学会でのシンポジストや座長など、さまざまな経験を積むことで、それをやり遂げたという成功体験が、本人の自信やモチベーションにつながるはず。若手がチャレンジできる機会をできるだけ多く作っていくことが、私たちマネジメント職の務めではないでしょうか。

私は日本麻酔学会のダイバーシティ推進にも携わっているのですが、

これからの時代は出産や育児、さらに介護の問題も踏まえて、誰もが仕事を続けられる環境づくり、そして誰かが休んだ時には周りがカバーできるような体制づくりが必須だと考えています。ペインクリニック部にも男女を問わず子育て中の医師が数名いますので、子どもの病気や怪我、学校行事などで休まないといけない時は、気兼ねなく休める環境づくりを心がけています。そのためには、休んだ時にお互いにカバーし合えるシステムや、人員に余裕を持った体制を作っておくことが大切だと思いますね。

## 右肩上がりの人生を目指して、常に挑戦を

医師の仕事をしていく上で一番大切なのは、自分自身の健康と体力。自分の体調が悪かったら、他の人の痛みを診ることはできないですよね。患者さんの治療にしっかりと集中するためにも、自分のコンディションを整えておくことが重要だと思います。嫌なことがあっても気持ちを前向きに切り替えて、なるべくストレスを溜めずに心身の健康を保つことも必要ですね。

そしてもう一つ、若い方たちに伝えたいのは、「時間はあつという間に過ぎてしまう」ということ。私自身、医師になってから今まで、本当にあつという間でした。人生は一度きりですから、最期を迎える時に「良い人生だった」と思えるように、常に右肩上がりの人生を目指して、自分に限界を作らずどんどんチャレンジしてほしいと思います。うまくいってもいなくても、どんな経験もいつかどこかで必ずつながってきます。すべての経験は無駄ではありません。ですから、若い皆さんにはぜひいろいろな経験をしてほしいですね。





interview

# 周りの協力を得ながら 仕事と双子育児に奮闘中

医療クオリティマネジメント学 講師 江口 明世  
循環器・腎透析内科学(循環器内科) 兼務

兵庫医科大学 2007年(平成19年) 卒

Akiyo Eguchi

## 私のモットー

塞翁が馬

## 専門分野

循環器内科 特に心不全、肺高血圧症  
医療クオリティマネジメント 学生講義など

## 資格

日本内科学会 認定医、循環器内科専門医、  
日本医師会認定産業医、医学博士(2017年)

## やりがい大きい2つの専門分野

臨床研修修了後、循環器内科に入局し、現在は心不全や肺高血圧症の患者さんの治療や心臓リハビリテーションを主に担当しています。循環器疾患の患者数は増加傾向にあり、年齢も子どもから高齢者まで幅広いため、とてもやりがいのある分野です。急性期は反応が早い治療の手ごたえも大きいですし、慢性期には患者さんと長くお付き合いをしていく中で、生き方やライフスタイル、死生観も含めて考えていくことが必要ですので、すごく勉強になる分野だなと感じています。

私には双子の娘がいるのですが、実は下の娘が生後1ヶ月を迎える直前に、家庭で乳幼児突然死症候群で心肺停止したことがありました。幸運なことに心肺蘇生が成功して、今は元気に

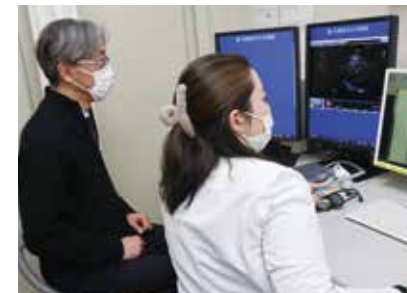
成長してくれていますが、とっさに体が動いて心肺蘇生ができたのは、これまでの循環器内科医としての経験があったからかもしれないと思うと、改めてこの道に進んで良かったと実感しています。

循環器内科だけでなく、昨年からは医療クオリティマネジメント学の講座にも所属しています。医療クオリティマネジメント学とは、医療の質や安全を追求する学問です。例えば兵庫医大では、薬剤アレルギーで患者さんがショック状態になった時に速やかに間違いなく対応するにはどうすれば良いかということを考え、必要な薬や対処方法をまとめた簡易の小さなボックスを作るという対策を講じています。これによって、患者さんの救命につながるのはもちろん、医療従事者の急変対応時の事故やストレスを軽減できます。これは言われてしまえばそんなことかと思うかもしれませんが、言われるまで気づかないものです。このように医療現場のさまざまな問題点を挙げて解明し、改善策を立てて実行することは「究極の臨床」だと感じますし、やりがいがとても大きいですね。

## 熱意を持って努力すれば、道は開ける

産休・育休を経て復帰して、3年ほど経ちました。双子を育てながら仕事をしていると、本当に毎日が精いっ

ばいで、いつも気づいたらもう夜、という感覚ですね。双子なので子どもが熱を出して休む回数も多くなってしまい、周りに迷惑をかけていると思うと辛くなってしまった時期もありました。でも、仕方がないものは仕方がないと自分に言い聞かせながら、周りの方への感謝と、「今度は私が手助けできる側になるからね」という気持ちをいつも持つように心がけています。



周囲の協力があってはじめて何とか働けている自分を目の当たりにして、「ありがとう」と素直に言えるようになりました

し、自分にもいろいろな事情があるように、他の人たちにもそれぞれ事情があるのかもしれないと想像できるようになりました。それは自分にとって大きな変化だなと思いますね。

女性がさまざまなライフステージを経てキャリアを継続していくためには、その人自身の熱意と努力が一番大切だと思います。熱意を持って努力していれば、助けてくれる人が自然に出てくるはずですし、今は社会の流れも追い風になっていると感じています。もちろん、一時的にキャリアを中断せざるを得ない状況や、何かを諦めないといけない時期もあるでしょう。でも、自分の価値観やその時々を状況を考えて取捨選択しながら、その時にできることに対して努力していくことが大切だと思います。いったん諦めても、少し落ち着いてから改めてチャレンジすることもできますから、その時に相談できるような人間関係を築いておくことも必要ですね。それは女性でも男性でも関係なく、人が仕事を続けていく上で大切なことじゃないかなと思っています。

私自身、人間関係に本当に恵まれていて、すごく幸運だと思っていますし、周りの皆さんには本当に感謝しています。たびたび休みを取って申し訳ない気持ちでいた時には「子どもがいてもいなくても、誰でも病気になることはあるし、みんな助け合い

だからね」と上司が声を掛けてくださったり、「当直ができなくてごめんね」と後輩に謝ると「先生は今まで十分やってきたんだから大丈夫です。気にしないでください」と言ってくれたり、たくさんの方から心が軽くなるような言葉を掛けていただいて、とてもありがたかったですね。

## 私たちは「最強で最高」だと信じて

仕事と子育てを両立するために苦労はもちろんありますが、子どもの笑顔や成長はどんなものにも代えたいと感じています。大変な時でも「何とかなる！」といつも自分に言い聞かせているので、後輩の皆さんにも「私も何とかなっているんだから、きっと何とかありますよ」と伝えたいですね。

以前、先輩から「君みたいな医師国家資格を持った女性は最強で最高やろ！」と言っていたことがあって、辛い時や挫けそうな時にはいつもこの言葉を思い出しています。医師を目指す人は、子どもの頃や学生時代に何かを我慢して努力してきた人だと思うんです。実際に医師になってからも、しんどいことや辛いことがあると思います。でもそれを乗り越えてきたからこそ今がある。そんな自分は最強で最高だと信じていることができたなら、また頑張ろうと思えるし心が軽くなるんですよ。それは女性だけでなく男性にも言えることだと思います。だから「皆さんは最強で最高です」とすべての後輩の方に伝えたいです。





interview

# お互いを理解することが 多様性への一歩に

医学教育センター 講師  
内科学糖尿病・内分泌・代謝科 兼務

庄司 拓仁

Takuhito Shoji

## 私のモットー

我以外皆我師

## 専門分野

内分泌代謝、内科一般

## 資格

日本内科学会 認定内科医・総合内科専門医・指導医、  
日本糖尿病学会 糖尿病専門医、日本内分泌学会 内分  
泌代謝科専門医、内分泌代謝・糖尿病内科 領域研修  
指導医、医学博士（2006年）

## 臨床と教育に力を注ぐ日々

私は学生の頃から、特定の臓器というよりも全身を支える血管に興味があったため、糖尿病と内分泌の教室に入局しました。主に慢性疾患を診療する科ですので、患者さんとのお付き合いは自然と長くなります。その中で、患者さんに何事もなく人生を全うしていただくことが、私たち内科医の本分だと思っています。がんなどを早期発見できた時や、診断に難渋した方の診断がつけられた時には、大きなやりがいを感じますね。

糖尿病・内分泌・代謝内科だけでなく、医学教育センターにも所属しており、学生への講義や、学習に困っている学生の面談や補習を行っています。現在は臨床よりも教育の仕事のほうが割合は大きいですね。学習につまずいたり悩んだりしている学生が、浮上するきっかけを作れたらと思い、いろいろと試行錯誤する日々です。ただ問題の解き方を教えるのではなく、臨床でどのように役立つのかを意識してもらえよう、工夫して伝えるように心がけています。

## 自分の「当たり前」にとらわれない

兵庫医大で働き始める前には、海外留学を経験しま

した。留学先では、多様な価値観を持つ医師や研究者の人たちと出会い、自分が今まで当たり前だと思っていた価値観は全く当たり前ではなく、あくまで一例に過ぎないということを知り、知識としてではなく皮膚感覚として理解できました。例えば、仕事時間中に子どものお迎えに行くようなシーンも、男女問わずよく見る光景でしたし、逆に昼夜を問わず実験に没頭している人もいたので、人それぞれいろんな状況があり、誰に対しても「こうあるべき」と決めつけるべきではないと思えるようになりました。留学を経て、多様性を受け入れる素地が自然にできたのかもしれません。



若い頃は、24時間365日いつでも仕事に対応するのが当たり前だと思っていた時期もありました。でも、体を壊して入院してしまう状況も何度か経験したことで、このままでは良くないと感じ始めました。高齢化が進

むにつれて、自分が診ている患者さんたちも歳を取ってきましたが、当然自分も同じだけ歳を取ります。人生100年時代と言われる今、それは自分事でもあると実感できるようになってきて、もっと持続的に働ける状況を作ろうと考えを改めたのです。

自分自身も無理をしたくないし、周りにも無理をさせたくない。そのためには、普段からお互いの状況をできるだけ共有しておくことが大切だと考えています。ですから、私は自分自身のプライベートな話を、職場での雑談なるべく発信するようにしています。家庭での困ったことや失敗談などを気軽に話すと、相手もつられて自分の話をしてくれることがあります。そうやってざっばらんに話せる雰囲気を作っていくことで、相互理解が深まっていくのではないのでしょうか。

普段からお互いの状況をわかっているならば、急なアクシデントで休まざるを得ない時でも、協力を得やすいはずですが、もちろん、周りへの甘えになってしまったりは良くないですが、普段はそれぞれができることを一生懸命やっている上で、何かあればみんなで助け合える環境づくりをしておくことはとても大切だと思いますね。

## 育児・介護・病気など、誰しも他人事ではない

私には7歳の娘と2歳の息子がいます。昨今は4月の0歳児クラスでなければ認可保育園への入園は困難です。私の娘も入園できませんでした。幸いにも当院の提携認可外保育園に入園できたため、妻が復職できました。

自転車にチャイルドトレイラーという荷車を付けて、当院に隣接する保育園に送迎していると、かなり目立つので正直最初は抵抗がありました。でも、注目される分、周囲からよく話しかけられるようになって、思いがけず良いコミュニケーションツールになりました。これをきっかけに、兵庫県医師会のダイバーシティ研修会に登壇させていただくなど、私にとって大きな転機になったと思います。

ダイバーシティ関連で発表する機会を何度かいただき、厚生労働省のデータなどで自分なりに調べていくうちに、例えば医療職の人が休職する原因として、産休や育休のほかに、本人の健康

問題や、親や子どもの介護など、さまざまな背景があることがわかってきました。ダイバーシティといえば、育児のイメージが強くなってしまっていますが、実際は人それぞれ抱えている問題は多様であるということを確認しておく必要があります。そのような認識をみんなと共有できていないと、これからの時代に職場を維持していくことは難しいでしょう。



チャイルドトレイラー

心身の健康問題や介護の問題は、すべての人にとって他人事ではありません。周りに助けてもらわないといけない状況は、誰しも起こり得るわけです。だからこそ皆さんには、「できる時に一生懸命仕事をしてください」と伝えたいですね。普段から周囲に気遣いをしたりサポートをしたりしながら、一生懸命に働いている人なら、困った時には自然にみんなが助けてくれるはずですが、それに頑張っているうちに、僕の場合は留学でしたが、きっと何かチャンスも巡ってくるでしょうし、将来の選択肢も広がっていくと思いますよ。





小児科学 教授  
地域総合医療学 兼務

## 奥田 真珠美

Masumi Okuda

私のモットー 臨床を楽しむ 趣味は研究

専門分野 小児科一般、消化器、感染症

資格 日本小児科学会専門医・指導医、日本感染症学会専門医・指導医、  
日本小児栄養消化器肝臓学会認定医、H. pylori (ピロリ菌) 感染症認定医、  
ICD (インフェクションコントロールドクター)



## 臨床を楽しむ、趣味は研究

### 「ピロリ菌」との出会い

ふと気づくと、医師免許取得から36年が経っていました。高校教師であった父が「自分の子どもに最後の脈をとってもらうことが一番幸せなや」と繰り返し、いつの間にか医学部を目指していました。田舎育ちで小学校の同級生は8人。小学生時代はソフトボールに夢中で投手で4番！中学生から軟式テニスを始めました。勉強はそれなりに・・・で、大学受験は共通一次試験で点数が取れず。「女の子が浪人するなんて・・・」と母親の猛反対を受け、奈良女子大学理学部に入学しました。でも、医師になることがあきらめられず、翌年、和歌山県立医科大学を受験し合格しました。大学生活で唯一の自慢は軟式テニスで全医体優勝したことくらいでしょうか。

子どもが好きで、小児科医になり、卒後2年で結婚、2人娘の母となりました。当時、和歌山県は小児科医不足で、産前6週、産後8週の産休のみで復帰。家事も子育ても相当サボっていましたが、フルタイムで小児科医として働き、当直も年齢に応じた回数をこなしていました。そんな折、「ピロリ菌」に出会いました。1982年にオーストラリアで初めて分離培養に成功された細菌ですが、研究のきっかけをいただいたのは1992年頃。和歌山医大微生物学教室におられた田中智之先生と同じ病院で勤務していた私は研究がたくて、お願いしました。「じゃあ、胃液か便。どっちを集めたい？」と聞かれ、「胃液！」と即答しました。田中先生が提案された、胃液を用いた研究はピロリ菌、便はロタウイルスだったのです。

ピロリ菌がいつ、どのように感染するのか、小児の感染はどれくらいあるのか・・・。当時はわからない事ばかりで、臨床の場で少しずつ検体やデータを蓄積して、学会や論文で発表するようになりました。「次はこれを明らかにしよう」「この課題はどのようにすれば、実現できるか」など、考えるだけで楽しくて、楽しくて・・・気づくとピロリ菌研究は私のライフワークになっていました。国内の学会のみならず、年に1～2回は国際学会にも参加するようになり、子どもたちは「お母さんが1日居ないのは当直。何日も居ない時は学会。」と思っていたようです。「そう言えば、お母さん、最近見ないよな～」とか。

### 片道160km、2時間半の道のり

市中病院で臨床医と研究を続けてきましたが、叶えられなかった夢がありました。大学病院で働く事です。当時の和歌山医大小児科の勤務はかなりハードで、子どもたちが小さかったこともあり、大学病院勤務は周囲の猛反対にあいました。ところが、冗談のような話から、夢が叶うことになりました。「篠山に来て、ピロリ菌研究しない？」元ささやま医療センター病院長 福田能啓先生がお声かけしてくださったのです。自宅は和歌山なので、車で片道160km、渋滞なしでも2時間半です。下の娘がまだ高校2年生。迷いに迷ったあげく、丹波篠山-和歌山市を週に2-3回往復するという生活が始まりました。日帰りだと往復320kmで、「トラック運転手だな・・・」と笑われました。分院ですが、大学病院で働くという夢を叶えました。そして、2017年から愛知医科大学病院、2019年からは兵庫医科大学病院に勤務させていただき、本院で働くという夢を叶えました。残りの時間も臨床を楽しみ、趣味の研究の仕上げにかかろうと思っています。

### 女性医師支援は幾つかの選択肢があるべき

もし、私が現在の支援を利用して働いていたら・・・子どもが生まれ、育休を取り、時短勤務、当直免除など、様々なサポートをいただいたと思います。良いことではありますが、十分な臨床経験や臨床研究、学会発表や論文作成ができず、大学医学部で教授として働いている私はいなかったと思います。女性医師支援は幾つかの選択肢があるべきだと思います。臨床や研究と子育てをバランスよく行うための支援、しっかりキャリアアップするため、当直も含めて男性医師と同等に勤務できる環境を作る・・・など。私は幸い、周囲にサポーターがたくさんいたので、子育てを助けてもらいました。参観日もほとんど行けず、一緒に過ごす時間も短くて、申し訳なく思うこともとても多かったです。2人の娘は私と同じ職業を選びました。今、診療や研究の事で相談しあったり、盛りあがったり・・・一緒に過ごしてあげられなかった時間を取り戻しているようにも感じています。

超音波センター (消化器内科学) 講師  
超音波センター・肝胆膵内科 医局長

## 西村 貴士

Takashi Nishimura

私のモットー あせらず一歩一歩着実に 専門分野 肝胆膵

資格 日本内科学会 認定医・総合内科専門医・指導医、日本消化器病学会 専門医・指導医、日本肝臓学会 専門医・指導医、日本超音波医学会 専門医・指導医、日本消化器内視鏡学会 専門医・指導医、日本がん治療認定医機構 がん治療認定医、医学博士 (2009年)



## 今いる環境で努力することが、成長に繋がる

### 先生方との出会いがなければ、今の自分はない

私は滋賀医科大学を卒業後、そのまま同大学の第2内科(現 消化器・血液内科)に入局しました。当時、消化器・血液・感染症内科では、大学の医局に残る医師が大半でしたが、入学前から「国境なき医師団」などで働くことを想像していた私は、医局に入局することは考えていませんでした。しかし、時期を同じくして、教授になられた先生が、消化器のみならず、血液、HIVを含めた感染症にも精通している方で、JICAの一員としても活動されていたことがきっかけとなり、自分も入局することを決めました。その結果、「夏休み」という名目で、ベトナムの地方での医療活動にたずさわることができました。

しかし、海外で医療活動をするにはあまりにも問題が多かったのです。当然、医療も重要ですが、教育の重要性が最も重要であり、まずは日本で医師として成長することが第一段階であると感じました。そこで、大学や関連病院で行われる消化器・血液疾患の研修を受けているうちに、あまり好きではなかった消化器内科、特に癌の治療に、徐々に興味を持ち始めました。

消化器内科医として研鑽を積みつつ、滋賀医科大学大学院に戻り、炎症性腸疾患の研究で学位を取りました。学位取得後は医員として小腸カメラやカプセル内視鏡、胃がんの内視鏡治療を主に担当していました。しかし、肝疾患診療をする医師がいなくなったため、消化器の中でも肝疾患を中心に受け持つこととなりました。その中で、海外ではウイルス性肝炎が蔓延している国がまだまだ多いということを知り、本格的に肝疾患診療に携わることとなりました。

肝疾患診療の研修のため、武蔵野赤十字病院へ1年間国内留学をした後、滋賀医科大学へ戻りました。その2年後に武蔵野赤十字病院で指導していただいた先生から、今の上司である飯島教授を紹介され、当院超音波センターへ赴任し、現在は消化器内科/超音波センターの講師、医局長として日々精進しています。

大学の医局に属すると、自分の意志は通らないのではないかと、思いがちですが、実際には、意見を取り入れてくれる医局も多いと思います。振り返ると、自分にとっては前述したことすべてが大きな転機であり、どの場面においても先生方との出会いがなければ、今の自分はないと断言できます。

もちろん、常に100%満足できる環境が与えられるわけではありませんが、今いる環境で努力することが大事であり、それがいずれ自分の経験として積み重なり、成長していくことができると感じています。

### 子育ては後輩の指導に通じる

当たり前のことですが、子どもは生まれてすぐになんでもできる、なんでも知っているわけではありませぬ。最初は、生活のすべてにおいて親が繰り返し教え、



家族での旅行写真



子供は失敗しながらも、徐々に自分でできるようになります。子供の中にもそれぞれ個性があり、習熟する速さ、器用さなども全く異なります。長男が小学校1年生のときには、朝持って行った新品の鉛筆を1本まるまるかじってきれいに芯だけにして帰ってくることを繰り返していました。ほかにもやや理解し難い行動がありましたが、今では一番下の弟に対してだれよりも優しく対応できる人間になりました。

こうしたことは、後輩を指導する場合にも当てはまります。指導する対象者の個性を把握し、それぞれに合った指導方法を考える必要があります。医師として成長するにはもちろん時間がかかりますし、いち社会人としての意識を持ってもらうことも必要です。育児に携わることで「根気よく、丁寧に、個々にあった教育を」がモットーとなりました。指導した医師やスタッフの人生に少しでも痕跡を残せたらいいなと思っています。



#### 夫婦間のコミュニケーションを大切に

妻は開業医の産婦人科で助産師をしています。子供4人を育てるためには共働きが必要ですが、妻も働きたいと言っていたので、全く問題はないと思っていました。しかし、自分は東京に行ったり(1、3、5歳の子を置いて1年間単身赴任していました)、兵庫に移ったりと、キャリア形成を含めて我が道を歩んできたにも関わらず、子供が熱を出したときや習い事の迎えなど、何かと妻に頼っており、彼女のキャリア形成を困難にしていたのです。妻はもともと意識が高いので、自分の道を歩めていれば順調にキャリアを積み、社会的にそれなりの立場で働いていたと思います。何回か、妻から「孤独だ」と言われたことがあります。これにはハッ

#### 後輩へのメッセージ

“医師”と一言で言っても、様々な道があります。学生、研修医時代には、今の自分は想像もつきませんでした。どちらかというと、そのときの状況を受け入れてきた(流されてきた?)ことが多かったようにも思いますが、必要なときには自分の意見を伝え、現在の姿となりました。

臨床医としての目線になりますが、日々、目の前の患者さんを相手に精進し、医学という学問としての視点をもち、基礎研究あるいは臨床研究にも積極的に携わってほしいと思います。また、視野を広げる、人とのつながりを持つという観点から、機会があれば是非、留学することをおすすめします。

としました。私は、朝早く、夜遅い生活で、子育てや仕事など妻の日々の奮闘や悩みを聞くこともせず、知らぬうちに会話も少なくなっていたことに気づきました。実は自分の気持ちを一番わかってもらいたい夫(私)に、気持ちが通じていないことも大きな不満の一つであり、精神的にも休める瞬間がなく、孤軍奮闘していたのだと思います。今も十分に対応できているわけはありませんが、妻の一番の理解者でありたいと思いつつ日々生活しています。大事なことは感謝の気持ちを表すこと、子供と同じく夫婦間のコミュニケーションを大切にすることだと思います。

#### ある程度の“あきらめ”も必要

私は、仕事と家庭を両立するうえで、自分の生活リズムをできるだけ崩さないようにしています。平日は出勤、帰宅時間をできる限り一定にし、早めに就寝して、朝型の生活をする予定です。私は、すべてをきっちりできる性格ではないので、それが幸いしているのですが、ある程度“あきらめ”も必要だと思っています。家庭には仕事のストレスを持ち込まないこと、自ら仕事についての話をしないこと、たまには家族とでかけることを心がけています。結果的に気持ちの切り替えができ、メリハリのある生活ができています。

私は、大型バイク、とくにアメリカンのバイクを趣味にしています。いまは家庭の事情により手放していますが、いずれはハーレーダビッドソンのバイクを手に入れてツーリングすることが夢です。いつか息子とツーリングにいけたらいいな、と思います。



かわいいペットたち

医学教育学 講師  
整形外科学 兼務

柏 薫里

兵庫医大卒業生

Kaori Kashiwa

私のモットー 「Happy」を感じられるように

専門分野 膝関節、スポーツ障害、成人の筋肉量及び質と疾患との関連

資格 日本整形外科学会専門医、日本整形外科学会スポーツ医、日本スポーツ協会公認スポーツドクター、産業医、いけばな嵯峨御流師範

## 「Happy」を感じられるように

#### 「一緒に仕事をしたい」という思い

私が医師になった頃、「こうなりたい」と思っていた姿は女性ではなかったかもしれませんし、ロールモデルを意識していなかったようにも思います。

2001年に整形外科に入局し関連病院で研修しました。前教授の吉矢晋一先生のもとで学びたいと考えていたところ、卒業5年目にして、吉矢先生の教授就任と共にチャンスが巡ってきて大学に戻りました。その時、「一緒に仕事をしたい」と思える先生に出会っていたことにも、そのチャンスが巡ってきたことにも感謝しました。先生のご専門は膝関節・スポーツ外科で、この時から、私はその世界に導かれ研鑽を積んでいくこととなり、その後の大学院での再生医療の研究や膝関節鏡手術・スポーツ外科に特化した施設への国内留学、さらに米国留学へとつながりました。

卒業後4年目頃の気持ちを少し掘り起こすと、膝より股関節の手術の方が楽しいと感じていたような気がしなくても、「一緒に仕事をしたい」という気持ちを優先したその時の私は、間違っていなかったと今でも思います。また、アスリートやリハビリ・トレーニング、予防といった分野に興味があり整形外科を選んだので、スポーツ外科に携われることも魅力的で、実際にプロや日本代表選手がケガから復帰し活躍する姿は感慨深いものでした。

一方、同じ学生であっても将来有望な選手の周りには多くの情報があり、より良い治療を受けることができる可能性が高いのだと再認識した時期でもありました。私の中高の経験から、学生スポーツの限られた時間を充実させ満足して終えてもらえるように、特に、将来、スポーツを職業にはしないけれど、部活を頑張っている学生に適切な医療を提供したいと思っていたので、ケガをした学生が最後の試合に何とか間に合い、満足して部活を終える姿も私のモチベーションを上げてくれるものでした。

#### 教育によって国や世界の行く末が変わる

大学勤務では、経験年数と共に学生や研修医の教育に携わる機会が増え、教育への興味も強くなりました。その頃に米国留学の話があり、今しかないと思い留学しました。準備はなかなか大変でしたが、それも含めて留学なのかな、とも思います。

留学先では、学外の整形外科医のレクチャーを聴く機会が毎週ありました。中には世界的に有名な先生もいらっ

しゃいました。他にも、メンタルケアやキャリアパスのセミナー、ノーベル賞候補レベルの研究者のレクチャーなど多岐にわたる学びの機会がありました。留学先のボストンには有名大学・企業が多く、様々な国から勉強や仕事に来ている人がいました。高校生や大学生、医療職、公官庁の職員、研究者、経営者など、職種も年齢も様々で、留学したからこそ出会えて話せた人たちでした。その時の仲間は日本の内外を問わず活躍しています。さらに、私は勤務医で臨床の世界にいるけれど、医師の世界はもっとずっと広く、働き方の多様性も知りました。医学教育もその中の一つです。整形外科に関する多くの学びを得たことに加え、このような経験も留学してよかったと思う理由の一つです。教育によって国や世界の行く末が変わるように、医学教育によって日本の医療の在り方や質が変わる可能性を強く感じ、それも早い時期からの教育が重要だと思いつつ帰国しました。その後、地域医療や総合診療に携わりつつ徐々に教育に関わる機会を得て、2022年にキャリアシフト(少しかっこよく言う)しました。

#### それぞれの「Happy」を感じられるように

たまに、とんでもなく大変な時期やもう無理だと思ふ瞬間があるかもしれません。それでも、周りに惑わされず、在る場所で一生懸命に取り組むことが大切だと感じます。誰かがきっと助けてくれます。私にはそんなタイミングで英文論文の初 accept や国際学会での受賞、海外留学などがやってきてくれました。この度も、2022年度 兵庫医科大学 女性医師・研究者顕彰のトップリーダー部門 次世代リーダー賞をいただき、また頑張れそうです。

現在は、教育を主軸に整形外科の臨床、研究との間を行き来できるような私自身の新たな働き方を模索しています。日々の小さな「Happy」を感じることができるよう私の心を保ち、患者さんにはそれぞれが目指す「Happy」を少しでも感じてもらえる診療を、学生には目前だけでなく少し先の未来にも「Happy」を感じられるような指導を心掛けたいと思います。

今まで、私を育てていただいた多くの方への感謝はもちろん、私の知らないところで支えていただいた方の存在を忘れず、後輩医師・将来の教育者育成に励んでまいります。いつか誰かのロールモデルの一人として、私の経験がお役に立つことがあれば幸いです。



消化器外科学 講師  
小児外科 医局長

## 野瀬 聡子

Satoko Nose

**私の Motto** 自分にできることを全力です

**専門分野** 小児外科

**資格** 日本外科学会指導医・専門医、日本小児外科学会指導医・専門医、日本新生児周産期医学会認定外科医



## 自分にできることを全力で

### 私のワーク&ライフ

私は医学部卒業後小児外科というマイナー科に入局した。入局の決め手は、当時大阪大学大学院に所属していた女性医師が、素晴らしい基礎研究を行いながらも臨床の現場にも立っておられて、小児外科という科が性に拘らず個人の資質を生かしてくれる場所であると感じたからであった。私が卒業した当時は、外科学講座では今と違って女性はなかなか仕事を続けていくことのできる講座ではないと学生に感じさせる場所であった。その中で、小児外科学講座は女性医師が数多く活躍しているように感じたのである。もちろん、メジャーな外科学に必要な体力が不要なのではないかと勘違いしており、実は小児外科も外科学にどっぷり浸かっている科であることに気が付いたのは、研修が始まってからであるのだが。

さて、キャリアとして小児外科医を選択した私だが、大学院で私に与えられた研究テーマは腸管虚血再灌流障害に関するものであった。その後、臨床を通じて経験した新生児外科で重要となる新生児壊死性腸炎の基礎的研究に興味を持つようになったのは自然の流れであったと思う。私は、夫の留学に便乗してアメリカのミシガン大学に research fellow として研究を続けさせてもらう機会を当時の福澤正洋教授の御厚意で与えてもらったのだが、これが様々な意味で私のワークライフを変えることとなった。留学中に日本との違いとして印象に残っているのは、アメリカで息子が通っていた kindergarten のお友達の女医のお母さんは「自分で働き方を選んでいく」と話していたことである。この kindergarten では、朝は7時から預かってくれる一方、幼児教育も行っており発音などの矯正もしてくれていた。また、Potluck Party などもよく開催されており、保護者同士や保育士との距離も非常に近く、働く女性

にとって非常に安心して預けることのできる場であった。日本に帰ってきてからは、やはり保育所は預けているだけに過ぎず、非常に罪悪感にかられてしまったものである。こういったことが日本とアメリカの医師の働き方に影響が出ているのかもしれない。

### 自分にできることを全力で

それにしても、研究室のボスは研究と臨床を見事に両立してみせていた。一方、敬虔なユダヤ教徒であり生活は家庭を基盤としていた（日本ではそのような人は、生活基盤が病院であることが多々見られる＝病院で暮らしている）。とはいっても、私のような非力な女性では、手術件数を数多くこなすおかつ体力を使う動物実験をこなすことなどできようもなく、理想を追いかけすぎて失敗した経験もある。その経験を踏まえて、現在の私の Motto は無理せず続けられる研究を行うということに落ち着いた。そして、臨床においても過去には、子育てとの両立が難しく一人で抱え込んで、「仕事をやめる」か「やめないか」までに追い込まれたこともあるのだが、当時師事していた奥山教授の「私にも十分できることがある」という助言で仕事を続けることができた。現在では一人で抱え込まずに、チーム医療と心に唱えながら、同僚に助けを求めることにしている。

このように私が仕事を続けることができたのは、ひとえに当時の教室のトップであり共に働いた仲間のおかげである。仲間の助けなしには研究どころか診療すらきっちりこなすことができなかった、と考えている。現在子育てが終了間近となりこれからは、部下のワークライフバランスを支える番だと考えている。自身の経験を踏まえ、彼ら自身のライフステージに合わせて、仕事を続けられるようにサポートしていきたい。

消化器外科学 講師  
炎症性腸疾患外科 外来医長

## 堀尾 勇規

兵庫医大卒業生

Yuki Horio

**私の Motto** 我々は人生に問われている立場である。人生とは何か？を問うのではなく、自ら人生の答えを導き出さなければならない。ヴィクトール・フランクル

**専門分野** 炎症性腸疾患の外科治療

**資格** 日本外科学会 外科専門医、日本消化器外科学会 消化器外科専門医・消化器がん外科治療認定医、日本大腸肛門病学会 大腸肛門病専門医、日本消化管学会 胃腸科専門医・指導医、日本ストーマ・排泄リハビリテーション学会 ストーマ認定士、医学博士（2019年）



## 自分本位では良い仕事はできない

### 自分本位では良い仕事はできない

私が、仕事を通じて得たものは、一人では何も達成できないということです。手術は、その最たるものだと思います。自分だけが技術を向上させれば良いものではなく、どのように助手を動かすか、また指導するか、助手になった時はどうすれば術者の役に立てるのかを考える。このように自分本位では良い仕事はできないということを学ぶことができました。

研究は、主に臨床研究を中心に行ってきました。疑問に思ったことを論文検索し、研究を行うことで新しい知見を得ることは、疾患の深い理解へと繋がり、患者に多くを還元することができます。また後進を教育することは、自身の更なる知識の定着へとつながります。そのため、大学に身を置くことは自分自身を良い学習サイクルに置くことができ、未来の後進を育てることに繋がるため、非常にやり甲斐のある仕事であると考えています。

医師になってから3～5年目の外科レジデントの際に、他の国公立大学出身の先生方と働かせていただいた経験があったことは、自分にとって大きな転機になりました。ただ手術を行って、目の前の患者を救えば良い、とだけ考えていましたが、前述した良い学習サイクルを実践している先生方が周りに多かったことが、良い影響を与えてくれたと思っています。

また医局に帰ってきてからも、当科の池内主任教授や内野教授が懸命に尽力されていたのも非常に大きな励みとなりました。

### 育児は後進への指導に繋がる

休日は、子供を遊びに連れて行ったり、勉強を教えたりしています。同時に、子供には遊んでもらっていますし、学ばせてもらっています。カラマーゾフの兄弟のクライマックスでアリョーシャが演説したように、子供時代に大

切に保たれたという美しい神聖な思い出こそ、最良の教育だと考えています。なかなか思う通りにはいかず、至らない事の方が多いですが、親の責務であると感じています。また、じっくり腰を据えて見守ることは、後進への指導と繋がることもあります。

外科医は、仕事と生活の両立ができる職業であるとは、なかなか胸を張って言えません。平日は、朝早くから晩遅くまで働き、休日も出勤する。昔は、空いた時間は自分のために使いたいと思っており、またその権利があると考えていましたが、今は少しずつ余裕も出てきたので、まず家族のためにできることをやってみようかと心がけています。

気分転換は、音楽を演奏したり、本を読むことです。子供と外でドッジボールやサッカーをしたり、体を動かすことも良い気分転換になります。モチベーションを上げる方法は、ジャンルを問わずに一廉の人物となった人の人生に触れることでしょうか。まだまだ未熟であると気付かされます。

### ワークライフバランスに関する取り組み

外科医にとってまだ難しい領域です。ワークライフバランスを取らなければならないと言われたのが、最近のことだからです。レジデントの時、上司に外科医は365日、昼夜問わずに外科医であれと教えられました。小生より上の先生方は、さらに厳しい労働環境で働かれてきたことでしょう。ある側面では美しいとは思いますが、上司も患者も、誰も自分の家庭を守ってくれません。患者に向き合う必要もありますが、家庭と向きあう必要もあります。なぜなら日本の未来を担う子供を育て上げるという責任を担っているのは母親だけではないからです。父親は背中だけ見せておけば良いという時代は終わりました。

現状では厳しい面もありますが、後進のためにも考え続けなければならない問題であると考えます。

### 後輩へのメッセージ

医師になったらどの大学出身でもスタートラインは同じであると耳にします。しかし、学問に対する姿勢のスタートラインは全く違います。厳しいですが、自身の現状をしっかりと受け止めて、謙虚に学ぶ姿勢が肝要であると考えます。卑屈になる必要はありません。過去は現在の瞬間を支配することはできないのですから。



病原微生物学 講師

## 小椋 英樹

Hideki Ogura

私の Motto 初志貫徹

専門分野 免疫学、自己免疫、感染症

資格 博士（医学）

なぜ病気になるのか、  
どうすれば良いかを問い続ける

## 「研究者になりたい」

思い返してみると大切にしている言葉がいくつかありましたが、「Motto」としては「初志貫徹」となりそうです。若輩ながら人並みに百回は挫けて来ていますし、その都度考え方が変わるようなので、真の意味でそうなのか微妙ですが。

子供の頃に自己免疫疾患を患って以来、治療を続けています。そのため、小学校の頃の「しょうらいの夢」は既に「研究者になりたい」でした。色々と余計なことを考えて生き、「いつ終わっても後悔のないように」という考えを地に、そうでなければ選ばなかったようなハイリスクな道を行ってしまったように思いますが、兎にも角にも、劇的な医療の進歩と隣合わせの世代であった幸運によって、何とか今に至っています。その道程で、多くの先生方にお世話になりました。

研究者という仕事について具体的に考え始めたのは、学生のころ物理学者のリチャード・ファインマン先生のエッセイをよく読んでいた頃かも知れません。大学を休学して留学したアメリカで、ファインマン先生の1番目のPhD studentの方と縁あってお会いする機会があり、偉大な研究者をとて身近に感じました。早く実験をしてみたいと思いつつ座学に励み、謎を解き明かすことの興奮と、そのきっかけになる天啓というものに、ひたすら憧れを抱く大学時代を送りました。もちろんその後は物理学に絆される事なく、自己免疫疾患というものを理解したいという一心から、大学院では免疫学を本格的に学ぶ事にしました。原因不明の自分の病気が勉強対象として最も近いせいで、再生医療と免疫のどちらかを学びたいと思っていましたが、「なぜ病気になったのだろう」という自分の根源的な問いを尊重したかったのだと思います。

## 「目の前の山を登りきる」

大学院では大阪大学で免疫学を学んで、研究に明け暮れました。基礎研究から臨床に貢献するような仕事

はなかなか生まれないものだと思いますが、それを成し遂げた尊敬すべき先生方の御指導のもと、サイエンスの考え方や本質を見抜くための姿勢など、貴重な学びをたくさん得ました。また、先生方に頂いた「目の前の山を登りきる」というお言葉、またラボミーティングの時に教授室に掲げられていた「樹はいくら伸びても天まで届かない それでも伸びよ天を目指して」という山村雄一先生のお言葉は、様々な思いと共に、今でも自分の背中を押してくれています。

その後、海外留学では、自分の病気を標的にトランスレーショナルリサーチのあれこれを学びました。免疫学的な見地から、自分を含めた患者の検体を数多く解析しました。アメリカに赴いた後、留学先のボスが同じ病気を持っていることを聞かされたり、実は同病の仲間がたくさん集まるラボだったり、様々な衝撃を懐かしく思い出します。2022年末には、そのボスが開発した薬が、長い苦勞の末にFDAに初めての予防薬として承認されました。私が多くの先生方のご協力のもと進めさせて頂いたCOVID-19研究がひと段落し、その成果を報告した時に、ボスのラボで自分が進めた仕事が新薬のメカニズム解析に使われている最中だと聞き、少なからず誇らしく思いました。

私が研究を通じて得たものは多めで、それは生きる意味や人生の目標だったりするかも知れません。それでも、当然、一人で行う研究が短絡的に目的地に届くものではありません。基礎配属や研究医コースなどでラボを訪れてくれる学生さんに、少しでも基礎研究やトランスレーショナルリサーチの意義を理解してもらい、医学の進歩の重要性を意識してもらう事を大切にしています。願わくはそれをライフワークに、目的の山頂を目指すための裾野が少しでも広がるお手伝いできればいいなと考えています。また、何らかのきっかけでもしも「研究者になりたい」と志す方がおられたならば、医学の未来のため、ぜひその初志を大切にさせて頂きたいと願っています。

病理学 病理診断部門 助教

## 木原 多佳子

Takako Kihara

私の Motto 一期一会

専門分野 外科病理学全般、炎症性腸疾患の病理

資格 病理専門医、細胞診専門医、分子病理専門医、医学博士

人との出会いが、  
自分の道と成長に繋がった

## 人体の不思議に魅せられて

人体の不思議に魅せられて、深く知りたいという気持ちから医師を志しました。大学3年生の時、当時奈良先端科学技術大学院大学に赴任されていた山中伸弥先生が母校に来られ、iPS細胞についての講義をいただく機会がありましたが、理解の範疇を超えた夢のような再生医療の最前線の話に圧倒されると同時に、ただただ「すごい！」という感覚だけを受けました。思えば、初期研修医や専攻医の頃から、指導いただいた先生方から研究についての話を物語のように耳にする機会が多かったような気がします。研修病院の特色からか、研究経験のある先生方が多く、業務の合間に未知の領域の話聞くにつけ、研究の匂いをほのかに感じていました。まったく恥ずかしい話ですが、兵庫医科大学の病理診断科に入局した頃は、廣田誠一先生が消化管間質腫瘍の発見者ということも知らず、周囲を驚かせたこともありました。病理診断の他にも病理学についてもっと学びたいという思いから大学院に進学しましたが、病理医を志した当初は、自分が研究をするなどと微塵も思っていませんでした。今では、このような身近な出会いが、医師・研究への道に違和感を感じることなく進むきっかけとなったのではないかと考えています。

## 「診れる目」を持つことができたとき

初期研修医の時に経験した病理解剖症例で、病理には患者様と遺族、医師、病院を守る力があると知り、病理医を志しました。病理診断は、頭の先から爪の先まで体の全部を診なくてはなりません。診断の技術を習得するためには、相応の経験と知識が必要で、長い道のりの中自分自身と向き合わなければならず、辛い戦いになります。同じ間違いを繰り返す時には、修正や応用のきかない自分の至らない所に嫌が上でも気づかされ、指導医の言葉を聞いているようで、本当には受け入れられていない頑固な自分に辟易すること

もあります。それでも自分が診断できるようになることこそが患者様のためになると信じ、毎日の積み重ねを経て、ようやく「診れる目」を持つことができた時、霧が晴れて、歩む道筋に光が差すような感じがします。また、難解症例や非典型症例で臨床医からの信頼を得られた時は、病理医の醍醐味を感じられます。病理診断と研究は似ているところがあり、実験を繰り返し工夫を重ねる中で、ある一定の法則を見出した時、ほんの少しだけではありますが宇宙の真理に近づくことができたような喜びを経験しました。病理診断や研究を通して、多様な人々と出会い、物事を多角的な視点で捉えることや、豊かな思考を培うことができたと思います。

## 女性がキャリアを継続するための3つの優先課題

少子化の影響を受けながら男女共同参画社会を目指す中で、多くの才能や技術、観点や価値観を取り込む上でも、様々なバックグラウンドの女性を含め、より多様な人々が働ける職場環境を整えることが重要です。女性活躍の推進は社会の喫緊の課題となっていますが、その中でも「仕事とプライベートのバランス」「出産・育児のサポート環境」「女性管理職のロールモデルの少なさ」の3つが優先課題として挙げられます。特に、家事・育児と仕事の両立を実現するためには、女性だけの問題とするのではなく、職場全体の意識改革と環境の見直しが必要と考えます。



講座の祝賀会



循環器・腎透析内科学 助教

## 大門 愛加

兵庫医大卒業生

Aika Daimon

私の Motto 笑う門には福来る

専門分野 循環器 特に心不全

資格 日本循環器学会 循環器専門医  
日本内科学会 認定医、医学博士 (2020年)育児がなければ  
気づけなかったことがあった

## 完璧は無理でも全力投球を

私は平成24年に兵庫医科大学を卒業し、前期研修修了後、循環器内科に入局しました。入局当時には馴染みがなかった『ダイバーシティ』という言葉ですが、諸先生方の精力的な活動により、この数年で学会などでも大きく取り上げられるようになったように感じます。兵庫医科大学は全国医学部の中でも、女子学生が多く在籍しており、学生時代から女性医師の働き方について考えたり、先輩医師に相談しやすい恵まれた環境にありました。

しかし、楽観的な私は、学生・研修医時代には結婚や育児は遠い未来のことだと他人事のように過ごし、当直や学会出張など自由気ままに過ごしてきました。そして卒後6年目で結婚、2回の妊娠出産、育児休暇の取得後、やっと『ワークライフバランス』というものを強く意識するようになりました。

夫は育児に大変協力的ではありますが、ほぼワンオペ状態になることから時短勤務での復帰を希望しました。循環器内科で時短勤務を経験された先生が居なかったこともあり、医局の迷惑にならないか不安でいっぱいでしたが、石原教授、朝倉教授を始め、先生方が快諾して下さり、安心して復帰することができました。臨床に携わる時間は減ってしまい、知識のアップデートに引け目を感じている日々ですが、患者さんの病態や臨床研究について医局員、他施設の先生方とディスカッションをしている時は、やはり「循環器って楽しいな」と思えることが、私の働くモチベーションとなっています。なかなか思い通りに仕事に全力投球できず落ち込んだり、帰宅後、子どもの笑顔を見て癒されたりと、育児中は心も体も大忙しです。2児の母となつてからは、『諦めないといけない時もある』と割り切ることを学び、自分が満足できる結果は得られなかったとして

も、その時々で納得できる最大限の行動が出来ていれば良いのではないかと、考え方が大きく変わりました。これは、育児なしでは気づけなかったことであり、退職していると感じなかったことだと思います。

## ライフプランに合わせて専門領域で研鑽を積める

『循環器内科』と聞くと、過酷な勤務やカテーテル検査・治療に伴う被爆のリスクを心配する方がいますが、女性医師でもカテーテル治療を専門に行っている医師もいれば、心エコーや心臓リハビリ領域で活躍されている女性医師も多くいます。自分のライフプランに合わせて、専門領域で研鑽を積めることが循環器内科の強みであり、また特に兵庫医科大学循環器内科はパパさん医師も多いことから、女性医師に対して大変理解あることは、どこの循環器内科にも負けたいと思います。幼稚園に入園した息子は、私の自由な性格が遺伝したようで、度々幼稚園からお呼び出しを受け、その度に、私が働いていることで、子どもたちが寂しい思いをしているのではないかと自問自答することもあります。子どもは遅く、新しい環境下で精一杯頑張っている姿を見せてくれます。子ども達からパワーを与えてもらい、自身も医師として社会に貢献し、医局に還元することが出来ればと考えています。



子どもたち

## 研究支援員配置制度を利用して

病原微生物学 講師 孫 安生

Aoi Son



利用開始：2022年6月より  
 支援時間：週6時間 (2-3日)  
 研究テーマ：潰瘍性大腸炎の発症メカニズムに関わる腸内細菌叢の解明  
 業務内容：患者情報データ整理、サンプル回収チューブのラベリング、解析結果データ整理、情報収集、業績整理、資料作成など

現在小学校6年生の子どもがおり、研究支援員配置制度を利用して頂いております。これまで所属していた大学でも育児・介護をしている研究者に対しての支援員制度を利用しておりましたが、対象は子どもが小学校3年生まででした。兵庫医科大学では6年生まで利用が可能で、とても有難く思っております。小学校高学年になったからと言って急に手が離れるわけでもなく、本当に助かります。今回幸運にも応募締切り1日前にダイバーシティ推進室のホームページで偶然募集を知り、すぐに応募しました。

その後、キャリア支援センター・筒井先生と面談させて頂き、データ入力やデータファイルの整理、グラフ作成、サンプルを入れるチューブのラベリングなどをお手伝い頂くことになりました。研究支援員の増谷さんは、正確かつ迅速に仕事をこなされるので、これまで溜まっていた仕事がみるみるうちに解消され、研究の進捗は格段にアップしました。

後になってパソコン教室で講師をされていたとお聞きし、なるほど！プロだったんですね！と納得した次第でございます。

今回利用させて頂いたタイミングでは、新型コロナウイルス感染症の蔓延に伴い、放課後小学校に残る事が禁止されたり、図書館では椅子が撤廃されていたり、子どもの居場所が本当に無い状況で、私自身も仕事との両立がしんどくて気持ちが落ち込んでいましたが、研究支援員配置制度を利用したことで仕事が捗り、前向きな気持ちになれました。ダイバーシティ推進室の皆様には本当に感謝しております。この制度を知らない先生方も沢山おられると思うので、1人でも多くの方が利用できたらいいなと思っております。





interview

# 医師として、親として。 二人三脚で歩む

呼吸器・血液内科学 助教 **吉原 享子**

Kyoko Yoshihara

**私のモットー**

keep calm and carry on  
～常に冷静に、そして行動せよ！

**専門分野**

造血器腫瘍、血液疾患全般、造血幹細胞移植、輸血医学、細胞治療

**資格**

日本内科学会 総合内科専門医・認定医・指導医、日本血液学会 専門医・指導医、日本造血細胞移植学会 認定医、日本がん治療認定医機構 がん治療認定医

**職場でも家庭でも、常に相談しながら対応**

**享子先生(以下、K)** 夫婦で同じ血液内科で働きながら、2人の子どもの育てています。長女が14歳、長男が9歳。2人ともいくつか習い事をしているので、夫と分担して送り迎えをしています。

**哲先生(以下、S)** 朝の出勤時間は同じですが、退勤時間がバラバラなので、それぞれの車で出勤しています。妻は子どもの習い事が終わる時間に合わせて退勤することが多いですね。私は帰りが遅くなるので、塾などで子どもの帰宅が夜遅い時には私が迎えに行くようにしています。

**K** 夜や日曜の送迎は夫にお願いしていますね。あとは、私が外来を担当していて都合がつかない時など、困ったことや問題があればその都度相談しながら2人で対応しています。同じ職場でお互いの仕事の状況がわかっているので調整はしやすいです。

**S** 仕事のことで家庭のことで、いつでも相談できるのは便利ですね。特に血液内科は早く決めないといけない状況がどうしても多いの

で、相談して決めるというステップが早いのは良いところだと思います。

**K** 家でも職場でも、24時間いつでも相談できますから(笑)。

**医師として働く姿を子どもに見せる**

**K** 普段から家でも仕事の話をしているので、ときどき子どもが話に入ってくることもあります。意外と的を射たコメントをするんですよ(笑)。土日に病院に行かないといけない時も、「こういう病気で入院している



患者さんの容態が悪くなったから」と子どもにきちんと説明するようにしています。息子はまだ小学生ですが、「将来は血液内科医になる」と言っているんです。親が医師として働く姿を見て、何か感じてくれているのかもしれない。



**S** 息子は私たちの仕事に興味があるようで、一緒にお風呂に入っている時にも仕事の話が出ることもありますね。そういえば、なぜか血液内科には、私たちのように夫婦で一緒に働いている医師や、親子で同じ分野に携わっている医師が多いんですよ。

土日も仕事があることも多く、子どもと一緒に出かける機会はどうしても少なくなってしまうのですが、その分、夏休みや冬休みといった長期休暇には、必ず家族で旅行に行くことにしています。計画を立てるのが好きなので、いつも私が旅行のプランを考えていますね。夫婦で同じタイミングで休みを取るようになって

しまうのは心苦しいのですが、その間は同じ科の先生方がしっかりとカバーしてくれています。

**K** 若い先生たちがいつも一生懸命やってくれていて本当に感謝しています。私は学生さんや若手の先生の教育も担当しているのですが、子育てを経験してからは教え方が根気強くなりましたね。子どもたちは全然言うことを聞かないので、若い先生たちが熱心に話を聞いてくれるだけでうれしくなってしまいます(笑)。自分が子どもを持つてからは、患者さんのご家族に対するケアを以前よりもしっかりと考えるようになったのも大きな変化ですね。

**もっと子育てしやすい社会にするために**

**S** 妊娠・出産でキャリアが途切れることへの不安や、いったん臨床から離れてからスムーズに復帰できるかという心配がある女性医師は多いと思います。でも例えば、男性でも女性でも、しばらく留学してからまた臨床に戻る人はたくさんいますので、数年キャリアが途切れること自体を、本人も周りもあまりマイナスに捉えなくても良いのではないのでしょうか。私自身は、2年半ほどアメリカのコロンビア大学に留学した経験があります。その時は、妻もオプザーバーとして同行して研修を受けていました。

輸血・細胞治療センター 准教授 **吉原 哲**

呼吸器・血液内科学 兼務

Satoshi Yoshihara

**私のモットー**

When it is dark enough, you can see the stars. ～暗いからこそ、星が見える

**専門分野**

造血器腫瘍、血液疾患全般、造血幹細胞移植、輸血医学、細胞治療

**資格**

日本内科学会 総合内科専門医・認定医・指導医、日本血液学会 専門医・指導医、日本輸血細胞治療学会 認定医、日本造血細胞移植学会 認定医、日本がん治療認定医機構 がん治療認定医、細胞治療認定管理師







アメリカ留学中のカナダ旅行にて

**K** ちょうど第2子出産の頃ですね。夫の留学が決まったので、その時期に産休・育休を取得して同行すれば2人目を産めるなと思って、英語を勉強して、コロンビア大学で研修をさせてもらえるように段取りをしました。アメリカはベビーシッターの普及率が高く、小さい子どもでも簡単に預かってもらえます。生後3ヶ月の子どもを預けてテニスをしたりできるんですよ。

**S** 確かにアメリカでは、子どもを預けて親が出かけるのは良くないという感覚は全くないですね。子どもを預けて夫婦でコンサートに行ったり外食したりするのが当たり前でした。

**K** 子どもを預けることだけでなく、子どもの行事に夫

婦そろって参加することも当たり前でしたね。幼稚園の授業参観やPTAの集まりには、みんな夫婦で来ていましたし、子どもの用事で仕事を休むのは当然の権利という感じでした。日本ももう少しそういう雰囲気になったら、少子化問題も改善されるのかなと思います。

今の日本では、子どもを産んで育てるという大変な環境の中で、職場に迷惑をかけてしまうのが申し訳ないという気持ちで働いている女性が多いと感じます。そうじゃなくて、「子どもを産んで育てているのは立派なこと。すごく頑張っているんだよ」という雰囲気を社会全体で作っていかないといけないと思いますね。今は同じ科で子育て中の女性はいませんが、今後出産を考えている若い世代がいるので、彼女たちが育児をする時には「頑張っているね」と労いながら全力でサポートしたいと思っています。



家事の時間は1日2時間以内。便利家電をフル活用します！

**ママ**

- 起床 子供朝ごはん 子供たちの送り出しの準備 洗濯ものをたたむ キッチン掃除 晩御飯の準備(軽く)
- 出勤
- 子供のお迎えやお稽古
- 晩御飯準備と晩御飯
- 子供のピアノのお稽古やお勉強
- 休憩・こどもの寝かしつけ
- 就寝

**パパ**

- 7:00 起床 出勤準備 子供の送迎 犬の散歩
- 8:00 出勤
- 18:00 出勤
- 19:00 子供のお迎えやお稽古
- 20:00 晩御飯準備と晩御飯
- 21:00 子供のピアノのお稽古やお勉強
- 22:00 食事・こどもとお風呂
- 23:00 在宅ワーク
- 24:00 就寝

吉原家のある1日

本学では、2010年から学生教育をはじめ、保育環境の整備や、働きやすい職場環境づくり等に取り組んでまいりました。2020年度には、本学の活動が文部科学省科学技術人材育成費補助事業「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ(特性対応型)」に選定され、主に女性医師・研究者の研究力向上と上位職への積極登用を目標に、さまざまな支援を行っています。

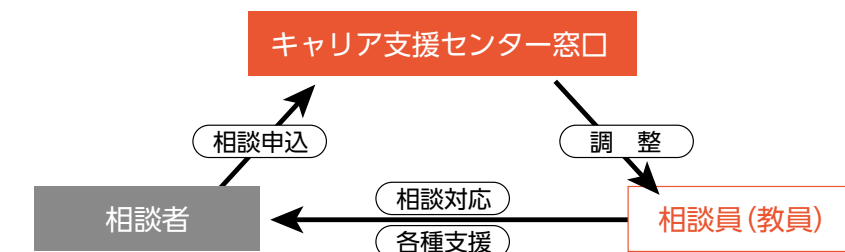
- ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ研究費助成
- 研究支援員配置制度(男女問わず)
- 英語論文投稿支援(校正・投稿費補助)
- 科研費申請資料作成支援
- 女性医師・研究者顕彰制度
- キャリア支援相談

その他、各種セミナーの開催、ダイバーシティ関連書籍の貸出、センター教員によるコラムや、さまざまな情報を発信しています。

### キャリア支援相談

女性だけでなく、仕事とライフイベント等の両立をする医師・研究者のさまざまな悩みに、経験豊かなキャリア支援センター教員が寄り添い、解決策を一緒に考えていきます。

研究のリスタート、キャリアアップ、子育てとの両立、復職に関する事など、何かお困りのことがあれば、いつでもお気軽にご相談ください。



【相談フォーム】 <https://form.run/@diversity-hyo-med-contact>



各種支援制度やダイバーシティ推進事業に関する最新情報は、公式ホームページから入手できます。ぜひご利用ください。

【公式HP】





兵庫医科大学ロールモデル集 *Nanairo* vol.1 医師・研究者 編

発行日 2023年3月15日

発行 学校法人兵庫医科大学

編集 ダイバーシティ推進室

所在地 〒663-8501 兵庫県西宮市武庫川町1番1号

電話 0798-45-6428 (直通)

E-mail danjyo-kyodo@hyo-med.ac.jp

URL <https://www.hyo-med.ac.jp/corporation/about/activity/diversity/office/>